

(資料)

本多静六・上原敬二著『信州駒ヶ岳森林公園と菅の台避暑地計画案』(大正十二年五月十日赤穂町商工会発行)の現代語訳
 Texts Translated into Modern Languages of "Proposed Plan in the Suganodai Summer Resort and Shinsu-Komagatake Forest Park"
 in 1923

齋藤 実咲* 小池 成美* 阿部 菜々子* 北條 千晴* 横関 隆登*
 Misaki SATOH* Narumi KOIKE* Nanako ABE* Chiharu KITAJOH* Takato YOKOSEKI*
 *長野大学環境ツーリズム学部

【底本】

名称：『信州駒ヶ岳森林公園と菅の台避暑地計画案』

著者：本多静六・上原敬二著

刊行：大正十二年五月十日赤穂町商工会発行

項数：四十四項

所蔵：東京大学大学院農学生命科学研究科森林風致計画学研究室

本論

第一、菅の台避暑の特徴

第二、菅の台避暑地計画の方針

避暑地の内容

一、菅の台一帯避暑地中心

二、駒ヶ岳及び不動瀧

三、共楽園

四、赤須城趾公園

五、馬見塚公園

六、光前寺

七、大御食神社及び大宮五十鈴神社

避暑地計画の根本方針

一、菅の台一帯の特徴を發揮すること

二、避暑地計画は第一期より第二期まで

三、避暑地を中心として探勝遊覽設備の統一を図ること

四、避暑地期成会または駒ヶ岳保勝会を組織

第三、避暑地計画事業の分期

第一期事業

一、測量

【作業方針】

見出しと全文を作成した。原本には図面を各含むが、本稿には図面を掲載しない。

見出しは全文から抽出した。書字方向は、原文のとおり縦書きとした。一行あたり
 の文字数は、本稿の様式に適合させ変更した。字体は、現代の常用漢字体に統一し
 た。踊り字については、現代語に組み直した。現代的な読み易さを加味の上、語尾
 を簡素な表現に改めること、長文に句読点を付加すること、など修正を施した。明
 らかな誤植は正當な表現に訂正した。なお、難読な漢字には、角括弧「」を附し
 て読み仮名を示した。底本には図面も掲載されるが、底本には本文中に図面も掲
 載されるが、本稿では現代語訳を意図するため、作業対象外とした。

【見出し】

前論 世界における一般公園発達の大勢及び森林公園の概要

二、諸般の調査

三、地割り

(イ) 村直営の経営地

(ロ) 住宅地

(ハ) 売却地

(ニ) 村内有志の供用地

四、道路及び一般交通機関

第一路線

第二路線

第三路線

第四路線

第五路線

第一期計画

一、菅の台一帯の避暑地計画

二、駒ヶ岳登山の順路

三、不動瀧及びその附近の探勝

四、廻遊公園

第四、管の台避暑地設計

一、建築的施設

(イ) 避暑地人口

(ロ) 倶楽部兼用料理店及び旅館

(ハ) 水泳場

(ニ) 誘いの住宅

(ホ) 諸種の小建設

(ヘ) 貯水池

(ト) 競馬場

二、造園的施設

(イ) 牧場地の選定

(ロ) 養魚地

(ハ) 太田切川堤防櫻櫛の植栽

(ニ) 植樹帯

(ホ) 果樹園

(ヘ) 花園

(ト) 動物舎

(チ) 小運動場

(リ) 建物の前庭

(ヲ) 苗圃

三、光前寺境内の改良

第五、駒ヶ岳登山道路

第一登山道路

第二登山道路

第三登山道路

第六、不動瀧探勝 附天然植物園

第七、公園系統

一、赤須城跡公園

二、馬貝塚公園

三、共樂園

四、大御食神社

五、大宮五十鈴神社

第八、雑

一、中央線、東海道線、北陸線その他院線主要駅

二、中央線辰野駅前

三、赤穂より駒ヶ岳への登山案内記、菅の台避暑地案内記

四、車馬質

五、組合

六、駒ヶ岳の山開き

七、伊那電車

八、赤穂村内の商人

九、夏季大学

一〇、登山道

一一、名物

【全文】

長野県上伊那郡赤穂村商工会は予てより信州駒ヶ岳の大自然を背景とし、その山麓太田切側の流域地方である昔の台一帯の地をして避暑地を設けようという計画を試みたので我々は同会の囑応じてここに調査に従事することになった。

その設計の大体方針とは駒ヶ岳の方は飽くまでも自然美を尊重し人工を加えるというもそれは単に欠点を補うだけに止め、これに反して昔の台の方は天然の要素も決して完全なりとはいえないので十分に人工を加え設備を尽してその目的を達したいと思う。

もしこの計画案にして多少たりとも駒ヶ岳を紹介するに興って力あり併せて避暑地計画書の方針確立し年々の登山客が増して避暑地の繁栄を加うことが出来ればただ赤穂村のためでなく実に我国における高山地帯風景利用策の進歩であると言える。

我々以上上の考えをもって調査に従事したが、ただ僅かに数日の踏査に過ぎないので、不完全の点が多いことを憂うるのであるが、尚大方の意見をも徹し漸次完成を期したいと思う。

今回の調査にあたり赤穂村長福澤泰江氏を初めとし商工会役員及び同村の有志諸氏が終始我々に同行し助力された所頗る「すこぶる」多いのは、ここに特記して厚く謝意を表する次第である。

前論 世界における一般公園発達の大勢及び森林公園の概要

欧米諸国においては従来市中における公園は市民に新鮮な空気を呼吸させる窓である。園の無い市街に住居する人は宛も窓の無い家に住むと同様衛生上大害があると称され、市街地には必ず公園を必要するという事で町費または国費をもつて多少幾多の公園が市内に設けられて実にその国文明の程度は公園設備の程度によつて測ることが出来ると言われる位に立派に造られてあつた。それなのに近

年汽車、汽船、電車、自転車、自動車等交通機関の発達に従い、市内の公園のようにあまりに小さすぎる様になった。即ち自動車では大阪の天王寺公園でも東京の日比谷とか上野とかの大公園と言われるものでも僅かに一分間か二分間で廻わり終わり、到底藤栗毛時代の市内公園では満足することが出来ない。一方には市中の商業益々発達して市民の生活状態愈々複雑となり器械的となり神経の刺激興奮甚だしいが為に時々静かな天然に接し休養することが極めて必要なこととなり、ここに市民の衛生上愈々完全な大公園を必要とするに至つたが、しかし市中には最早経済上大地積の公園を造ることは許されなくなり、また一方技術の上より見て到底市中に完全な公園を造ることは望まれなくなった。

元来都市公園は樹木に適當して居ないその一例を示せば、百分の一の硫黄を含む石炭の煙中には大抵、千分の一の亜硫酸瓦斯「ガス」を含み、この瓦斯は草木は勿論人畜にも極めて有害な毒物である、人間は苦しくなれば他所へ自由に避けることが出来、あるいはその毒を治療するから左程にも思わぬが草木殊に樹木は多く亭々として聳「そび」えて居るので逃げる事が出来ない故に植物は普通この瓦斯中に数分間包まれる時はたちまちにして中毒して枯死するのである。それなのに実際我国で使用する石炭には大抵百分の一内外の硫黄を含み殊に下等の石炭には百分の一・三以上のものが多い故にこれら石炭より発生する煙にはこれに少なくとも百倍以上の空気を混和し百万分以下の弱度としなければ草木斑に人畜に無害とする事は出来ない。それなのに静穏の日には毒煙は宛も箒の様に一里も二里もの先で殆ど空気を混和すること無しに棚引くもので有るからこれらの毒煙に包まれて公園その他の樹木の枯損するのは理の当然で大阪住吉公園の松や東京上野、芝公園の松、杉、樅「もみ」等が枯れ尽きそうとしつつ有るは根を踏み固められる害や土性の悪変させること、病虫害なども手伝うものでは有るけれどもその最大原因はこの煤煙である。

右の理由によつて市中には技術上完全な大公園を造ることが出来ないのみならず土一升金一升の高値な市中に自動車で駆け廻れる程の大公園を造ることは到底出来ない。そこで市の外に大公園を造る事になったが、市の外でも自動車で数時間運動することの出来る様な大公園は到底その地積を得られないのみならず、そのように大公園になると到底従来のように箱庭式の公園や、また仏国式の幾何

樂的、また規則的な庭園にすることは出来ない、結局広大なる自然式の山水風景的にするより仕方が無い、それなのに広大な自然式の山水風景は多く山林に存する。そこで市街地に近い所の大山林を公園的に設備する自然の大勢となり市街地附近の大森林はいずれもその市に付属し、またはその市に關連する所の大公園に利用され、その森林には従来の林業として利用する取扱法の外更に美的または公園的取扱を加え交通機關を完全にし、自由に散策娛樂の設備を施すに至り所謂森林公園なるものを生ずるに至つた。

要するに今日交通機關の大勢は遠距離に大貨物を運ぶという国の幹線は未だ汽車であるが従来輕便鉄道や汽車でも敷設しようという所は大低自動車を用いるという。大勢である鉄道や電車では勾配や曲りを取るに困難であると新に軌道を敷設するために多数の田畑を埋め大資本を固定する損がある。それなのに自動車道は今日の道を少し抜けて三間以上四間位にすれば十分で(困難の所は二間半迄辛抱出来る、尚工事の困難なる所は路傍の溝の上に板石の蓋をするだけでも今日の県道を三尺や五尺抜けることが容易に出来る)ただその容易に抜ける余地のある所ではなるべく四間または四間以上の道幅としその中央の三間だけ完全なる砂利道としその両側は芝草地に止めその外に排水溝を造る。排水溝をなるべく切石積でなく、平らな広い溝とし自動車の車輪が溝に落ちることあるも直に走り出ることの出来るように造るのが宜しい。實際自動車の往復には正味三間あれば宜しいけれども両側に余地のある程安心して走り得るものである。また自動車道の中で断崖等危険の場所には丈夫な駒寄を造つて置く必要がある。自動車道の勾配は十二分の一位迄は結構で極端は八分の一極く、短距離で道幅が広ければ六分の一迄迄行けるから汽車や電車に比して余程道が短くなつて、しかも安く出来る加うるに客車等も御祭等必要の時には、どこからでも何百台でも一夜の内に持て来て使用することが出来る便がある。故に私はこの赤穂においても現在の軌道以外にはこの自動車の發達を望むのである。

既に東京や横浜において三千台近くの自動車が出来て私共のような貧乏人でも家族三人以上一所に行く場合には人力車より余程安く行くので、つまり今日では経済上人力車より自動車を多く用うる様になつた殊に金持の人等は日曜毎に家族を連れて箱根辺に東京横浜から自動車で遊びに行く人が極めて多くなり、既に箱

根では二千数百尺の高地強羅附近には温泉別荘地の計画成り遊園地小動物園等設置され、山上迄自動車を通じその他の地方も大部分自動車道に改造したという大勢である。

そういう自動車とか自転車とか均一制の電車とかいうものに乗つて行くに従来の街にある公園等ほとんど大きな公園でも一分か二分で駆廻つて「かけまわつて」舞う故に従来よりもより広大なる公園を要求する様になりました。しかしながら市中においては地面に限りがあり到底そういう広大なる面積を取ることが出来ないのみならず、元來朝夕見慣れた所の街の中よりもむしろ変化を求めて目新しい山手の方などの公園に行くことを喜ぶのである、また近來交通機關發達の為、容易に遠方の公園に行き得るようになったから、したがつて広大なる森林公園の發達を来し、また實際東京は昔から四里四方といわれ昔は私の住んで居る渋谷区から浅草公園に行くには一日掛りでしたが、今は電車で東京中端から端迄六錢で一時間以内で行ける故に東京の街の人は土曜日とか日曜日とかには王子とか品川とか多摩川とか街の外に散歩に行く様になった。そこで都市郊外にもこの目的を満足させる為には電車が発達して市民は日曜日とか祭日にはこの電車や自動車を利用して郊外散歩に出掛けるようになった、したがつて浅草や日比谷公園等は田舎から出て来た人々所謂赤毛布の行く所になつて仕舞つても市民は日比谷公園などへは行かない。事實欧米の市中の公園は最早子守や子供の遊び場となつて市民は大低街から外の山林公園に散歩に行くようになった。その為には街の周囲にある森林の一带を公園林にして公園的設備を為す必要が起り従つて一般森林の取扱いは方を教うる林学中に特にこれら森林に対しては公園的取扱いをなす為には森林美学という新しい学科が出来ました。日本においても私の専門講座として居る造林学の一部分として多年この森林美学を講じ、特に近年は農科大学の講義として造園学の講義を設け一般風景的園芸即ち庭園、公園、風致林、森林公園等の講義をして居るのである。

これらの公園は単独に存在して居ては意義が無いのでよくその町村市街の状態に鑑みそれらを連絡して一つの公園系統というものに作り上げる時初めてその利用存在の意味が明になるのでこれは近來の都市計画の眼目である、当地方においてもその精神を準用して本論の中で述べることにした。

私は右等の縁故により日比谷公園の設計を初めとしその他東京の十余の公園
松島、宮島、名直屋、箱根、日光、奈良、北海道その他ほとんど日本における大き
な公園は間接または直接に私が関係する様になった次第である。

今ここに欧羅巴「ヨーロッパ」における森林公園の実例を挙げて見ると仏蘭西
「フランス」のバリ「パリ」には従来立派な大公園が幾つもあり殊に「ポワトブロ
ン」という大公園のようなのはその面積実に九百七十九町歩ある世界一の立派な
大公園なるにかかわらず近頃ではバリの街から八里距つた「フォンテンブロー」
という所に森林公園を作つた。これは元那破帝「ナポレオン」一世が住んで居た所
であつて、ここに一万七千町歩という大きな官林がある。その官林全体を公園と
しバリから八里巴距つて居ても自動車で行くと一時間内外で遊びに行くに程よく
私がこの公園に行つてみた時などは汽車の便もあるから私は汽車で行きそれから
林内は親譲りの自動車で行つたがバリから沢山の人が自動車に乗つて遊びに来る
巴里市から通ずる道幅十一間の立派な並木道を何百台という自動車が続つて来て
走つてきた故に一万七千町歩という大きな面積でなければ自動車で到底半日も廻
ることは出来ない。仏蘭西では右の外沢山の森林公園が出来た、それから獨逸「ド
イツ」の都伯林「ベルリン」においても沢山な大公園があり就中「チーヤガルテン」
のようなのは二百五十七町歩にかたる大公園であるがそれにもかかわらず更にそ
の街の端から続いて居る所の「ポツダム」の離宮に達する間、数千町歩にかたる
松林を悉く森林公園に編入して公園の設備をなすようになった伯林から「ポツ
ダム」離宮迄は一面の砂地で松林となつて居るから所謂白砂青松の松林が「帯に
森林公園になった。また私が永く遊んで居りました「バーデンバーデン」の温泉場
の公園林は元来「バーデン」とは湯に入るといふ意味で国の名が「バーデン」とい
われる位温泉で有名な国である。これは獨逸連邦の一つでその「バーデン」国の
「バーデン」即ち「バーデンバーデン」に私は長く滞在して居つた、しかも温泉は
一軒しかない。但しこの一軒の温泉は極めて宏壮美麗なる石造の大建物で多数の
一人入りの温泉の外に砂風呂もあり蒸気風呂もあり湯灌もあり、また広大なる泳
ぎ湯もあり、中で遊泳したり飛び込んだりすることも出来る。また階上には医者
の診察所、按摩器械、その他の各種の体操器械、理髪所等美に完備して居り善美を
つくして居る。その一箇所の温泉の為に非常に沢山な御客が来る。外には何も産

物はなくただその温泉ばかりで成り立つた所であつて人口（一九〇五年）は一万六
千二百三十五人しかない。しかし極めて有名な温泉場で浴客は一年に七万余人も
ある、非常によく設備が出来て居り街全体が公園といつてよい位で街の中に公園
が作つてあるのではなく公園の中に街があるいつてよい位である。街のどこを散
歩しても芝などは綺麗に刈り込んであり色々の草花が往來の両側に植えてあるか
ら街の中を通るにも完全なる公園の中を通ると違ひはないような設備がしてある。
それにもかかわらず尚近頃は自動車が増えて来て自動車に乗る御客に狭い街
のみではいけない。このようにいうことでは長く逗留する客を得ることが出来な
いというので近頃は街の周りにある北側の五千町歩の御料林とまた南の方にある
三千町歩の官林を合わせて八千町歩さういふものを公園林に編入して立派な道路を
造つた。従來の山道は材木を伐つて出す道であるから広い所で三間しかなくかつた。
私が行つた時はその三間幅の道を四間幅に広げて居つた。それから実に感心した
のは日照りが続きますと多少埃が立つ。その埃を鎮める為八千町歩の森林中數十
里に亘る「わたる」車道に埃が立たない様に水を撒く。これは特別撒水車があつて
一頭または二頭の馬でひく大きな箱である。それを谷から灌の落ちる所などに廻
して水を入れてその馬で毎日毎日ずつと撒いて歩く。それは朝早く埃の立たない
中に落葉などを箒で掃いてその跡に水を撒いて置くのである。これは大変厄介な
事と思つて段々調査して見ましたが道の修繕改築等の費用は別として水撒きと掃
除のために八千町歩の公園に対して我國の金で年々五万二千円使つて居る。その
金は誰が出すかという山林から出して居る、それは一町歩幾らに当たるかとい
うと一町歩年に平均六円五十銭一反歩六十五銭ずつで道路掃除、水撒きの為費用
を出して居る。そんなに金を掛けては山林の収入が減じはしないかと聞いて見た
所が小林区所長のいうのに向に減らず却つて増して居る。前に道路が完全しな
い時は山の中に人が来なかつた、それが為山の中では枯枝とか枯木などは誰も
買手がなかつた所が今日は道がよくなかつた為山の中に御客が沢山山林の産物
が高く売れる様になり利益を増したと言われた、ここに注意して置くべきは欧米
諸国では山林中の空気は清浄である山林中の空気には「オンゾン」という物質があ
つて肺の病や呼吸器病の黴菌「ばいきん」を殺す働きがあると信じられ山林中に
住み山林中を駆廻り山林の空気を呼吸して居れば、色々の病氣は癒り弱い人が丈

夫になり殊に呼吸器病に効があるという医者の説を信じて近頃では谷の奥の方の四方鬱蒼たる森林をもつて囲まれている幽邃な所に「クールアンスタルト」所謂保養院が沢山出来て居り身体の虚弱な人が沢山保養して居る、それでおかしい話がある、私がおかしい所の森林調査に来た時に小林区署長が案内したこの小林区署長には立派な官費の自動車がある。その自動車に細君と娘さんと私とを乗せて一日山の中を案内しようといった、ところで私は日本流義に一日廻るなら握飯を忘れてはいけない。腹が減っては困るが、そんな事を聞くもおかしいから黙って附いて行くと十一時過になるとその山の中にある立派な「ホテル」に着いた、ところがその「ホテル」には二百何十人という滞留客が居て毎日その附近の山林を散歩して療養して居るので大勢の客と共に「ホテル」の前の芝生地で立派な中食の馳走になりました。これらの客人は温泉に入るためでなく森林内の空気療養に来て居るので毎日山林中を運動して居るのであります。とにかくこれらの「ホテル」が出来た為に枯枝、枯木あるいは落葉の様なもの迄しかも値が高く売れるようになったから道路費を負担しても山林局御料局の収入利益は減らないという話であった。そのほか、澳地利「オーストリア」の都「ウィーン」におきましても市内及び市の外側に幾多の大公園があるのかからず市を囲める「ウィーナーワールド」をいう大森林及び草地全体を数年前「二千万円にて買入れ市の公園に編入しまして「ウイン」市人の保養行楽所にした、要するに市街の近所にある森林はその街の風致上はたまた街の保養散歩運動に行く必要上何れも公園林として普通の山林事業の外に公園的の取扱いを為すのが欧米文明国今日の大勢である。

そうであるならば諸君この公園林なるものはどのようになる風に取扱うかというに、これは農科大学の造園学の教えるところであつて委しく述べれば際限がないから極大体だけ御話して置く、つまり自然の山水美術に森林美、樹木の美を十分に發揮させてその市の風致風景上あるいはその市の人の娯楽に適當にさせるよう森林事業を経営するので、市の風致に關係ない所とかあるいは市の人が行くことが出来ない見ることの出来ないような所は全く普通の山林事業と同じ取扱いを為すのである。また街からは見えない所でも散歩する道路から見える所は風景を増すべき樹種を選んで植える。即ち櫻とか楓とか椿とかを混じて植え、且つ人の散歩に行く道の両側には多少公園的設備をする。例えばこの辺の山であるところ

までも草山ばかりで風景が単調で飽きる、そういう所にはその単調を破る為に喬林を仕立てると山に色彩りが出来、また青い木の中に楓や櫻の様な赤い木が交ると色の調和上赤いものはいよいよ赤く青いものはいよいよ青く、その色が生きてくる。この点から森林の中の道路においても松、杉、檜等の真黒のものばかりでは飽きるから華麗「はなやか」な紅葉樹または山櫻その他の潤葉樹を交えて植えます。しかもそれは天然に生えた様に植える、即ち人工林の山の様に樹木を並べて植えるとか列を正して一間置きに植えるとかいうようにせずして峯に松があり谷間に櫻があるとか岩の上に躑躅「つつじ」があるとか自然その所に生えたように不規則に植えるように同じ木を植えるにしても従来の並木の様に一目して人が植えたものであるという事が分かる様ではない、たいがい人が植えても自然に生えた様に見える必要がある。即ち原則として「森林公園はその内に存する通路と建物との外は一切人為を加えたという事を見せない様にするのである。それらの具体的方法は一々その場所に適當した方法があるので本論の中で追々に説明して行こうと思う。

本論

第一、昔の台避暑地の特徴

由来夏季を利用する高原避暑地においては天然の要素と人工の設備とが伴わなければならないものである、ただ高原地方であるからといって避暑地に適當するということはいえない。たとえば一時的には繁栄することがあつても永続する望がない。それらの要素の内主要なるものを挙げれば氣候の冷涼、物資供給の潤沢、滞在設備の完全、風景の佳良、交通機關の關係等である。天然の要素はある程度までは人工の施設によつて補われるものである。

今昔の台の避暑地について考察するに天然の要素は決して豊富であるとはいわれない、寧ろ人工的施設を待つて目的を達し得る場合の多い様に思われる。元来山嶽国である信濃においては開かれては開かれてはいる溪谷即ち高山山麓地帯で展望の利く所はその数に乏しいのであるが管の台はその列を破つて開豁な溪谷を有するもの一つである、そして高原地方風景美の骨子である溪谷美と原野美とを併有して居る観がある。今光前寺の台に立つて山麓平原を遠く望めば八ヶ嶽は遙に雲間に模

糊として簞え立ち、背後には霊峯駒ヶ岳は三十六峯の秀を抜き千古の雪を頂いて高く雲表に聳えて「そびえて」居るがその山嶺は実と呼べ簞えないばかり指呼の間に鮮である。そして一度東方遙に眼を転ずるとそこには天龍の清流季絶として日夜長蛇の流を送って行く、加えるにこれらの山河を連ねて大田切の溪流はその名のように滾「たぎ」り落ちる力物凄くも駒ヶ岳八千八溪の水を集めて永遠に天龍の流に向かつていく所真に溪流美の偉大なものがある。

このように山水共にその明眸を望み得る所は伊那路十里の間を過つてただ僅にこれを赤穂に求めることが出来るのみである。ここにおいてか切石ヶ原は溪谷、溪流及び原野に加えるに山嶽と背景と遠望との特徴を持つて居るのであつてこれらを人工の設備即ち第一に交通機関によつて巧に連絡するにおいては何れも著しい手入れを加えないでそのまま利用されるのである。即ち赤穂の避暑地計画の大方針は天然の要素を巧に利用し必要以外の手入れを加えず人工の施設を完全にして天然の欠陥を補うということになる、将来理想的の避暑地となるには一つに人工施設の完備をどのようにするかである、殊に外人向きの避暑地計画を立てるに当たつては一層この感を深くする試に大正七年夏季おける我国有数の外人向き避暑地における来遊及び滞在の人員の概数を挙げて見ると信州軽井沢三千人、長崎県温泉嶽七千人、日光中禅寺湖五千人、静岡県御殿場二百五十人、安房北條二千人、箱根七千二百人しかもその多数は設備の不完全であるが為に空しく滞在半ばにして引き上げたり、あるいは初めから滞在の意志なくして来遊するのである、彼等は設備さえ完全にその滞中に満足を与えるならば夏季を通じてその地に留ることを希望して居るのである。故に菅の台避暑地にして将来設備を完全にすればこれら多数の来遊外人を迎え得ることは火をみるより明な事実である。

第一、菅の台避暑地計画の方針

避暑地の内容

今ここに避暑地経営の方針を述べる前にその内容となるものを列挙して簡単に説明を加えよう。細い設計は追々と説明する。

一、菅の台一帯避暑地中心

これはいうまでもなく計画地の中心である大田切川の流域にあつて開潤雄大の景あるも地形やや単調の嫌がある人工の設備を完全にしない外はない。

二、駒ヶ岳及び不動瀧
森林公園としても、また登山の目的としてもこの計画の中心となる不動瀧は正しくその山系中唯一の名勝地である。

三、共楽園
大田切川の断崖の上にある公園であるが明治二十六年に造られたもので已に公園としての結構を備えて居り眺望誠によく夏季における遊園地として設計するに適する。

四、赤須城趾公園

天龍川の流を眼下に眺める所、櫻の名所菅沼の長堤を望んで天台の古刹長春寺の境内を取り入れてその特徴を發揮すべきである。

五、馬見塚「まめづか」公園

村の南端にある小公園で、これは水景を中心とし秋草の公園とするのが適當である、また読書する人の為、休息を望む人の為に必要な設備を施してそれらの要求を満足させることにする。

六、光前寺

切石ヶ原の続き駒ヶ嶽山脈の麓にある天台宗の古刹であつてこれが避暑地の人工的施設と相俟つて色々に利用される便利を持つて居る。

七、大御食「おおみけ」神社及び大宮五十鈴「いすず」神社
前社は郷社、後者は村社であるが何れも唯一の産土神社である。

以上を巧に按配してその特徴を發揮し滞在客にも一時の来遊客にも、登山の人にも、また村民に対しても各々その土地に飽かせずに思うままに旅行の樂を得させる用意が大切である。今それらの位置と關係とを模範的に示せば左の通りである。

避暑地計画の根本方針

今避暑地計画の根本方針を挙げて見れば

一、菅の台一帯の特徴を發揮すること

即ち山嶽、溪流、河流、原野、史蹟等の利用を完全にすること。

二、避暑地計画は第一期より第二期まで

必要に応じて順次施行すること。

三、避暑地を中心として探勝遊覽設備の統一を図ること

即ち、第一廻遊路線駒ヶ岳登山、第二廻遊路線不動瀧及び附近探勝 第二廻遊路線廻遊公園

四、避暑地期成会または駒ヶ岳保勝会を組織

郡村当事者、商工会、青年会、農会その他直接間接関係ある有志をもって会員とし、更にその内には赤須城趾保存会のように部分的に小会を作り相協力して発展の方策を樹つること。

以上施業の方針は各々その目的とするものによつて違ふ。例えば内地人に対すると外人に対すると、一時の滞在客と避暑滞在客とに対すると、登山者や村民に対する方法と何れも違わなければならない。これは経営当事者の常に考えなければならぬことであつてその標準を誤ると折角の苦心もこれを受ける人に容れられないで不快の感を与えたり、村民の葛藤を起こしたりする様なこととなり結局折角の設備が無駄になつてしまふ。例は従来往々見る所である。

第二、避暑地計画事業の分期

避暑地計画のみでなく公園でも住宅地でもその事業計画を立てる時に当たつて大切なのは設備を施す程度で来遊者の割合ということである。即ち多額の費用を投じて施設をしても一向に来遊者がなつかないとか、あるいは彼らの要求する所に一致しないという様では折角の経営も無駄になつてしまふ。あるいは、また来遊者は盛にあつてもこれに伴う設備がなくても困る。ここにおいてか来遊者の増加に応じて必要の程度を考えて施設をすることを企てなければならない。この両者は車の両輪の様に密接な関係に立つのである。その内で大切なことは本年の景況から判断して翌年の大勢を察することである。設備を加えようとするに当たつて果してよく来遊者の要求を満足する否かを色々な方面から研究して着手するので前述の保勝会などはこのような場合に大に必要となるのである。

第一期事業

一、測量

避暑地の計画は単なる公園または庭園の設計と異なり住宅区の設置であるから測量の精密の程度がそれらより一層必要となる。殊に溪流を引いて人工の瀑布とし溜池をする場合などには土地の高低を十分に知らなければ時は水が逆流する様な

現象も起こる。

二、諸般の調査

避暑地の成立する上に必要な総じて調査をする必要がある、物資供給、生産の関係、交通の関係、各方面の住宅地の比較調査、来遊者を招致する方策等でこれら調査は保勝会などで委員分担とすれば宜しい。

三、地割り

ここに地割りというのは避暑地全体を遠き将来の大勢を察して大体方針の下に分割し各々今後の施設設計の基を分かつものである。

地割りの方法についてその主要なるものを挙げて見れば

(イ) 村直営の経営地

村において直営とする区域をいふのでその内には建築敷地例えば温泉、料理店、旅館、俱樂部、休憩所、展望台等、次に運動場、庭園、公園、道路敷、広場、前庭、貯水池、養魚池、その他必要な設備に供する敷地

(ロ) 住宅地

避暑の為に来る人に供する住宅地貸付予定地を残して置く、殊に外人の為に一区画別にとつて置いて内地人と共同にしない方がよいから、予めその区域を想定して置くこと

(ハ) 売却地

飛地または避暑地計画に不用となる土地は売却してその代金を経営資金に繰り入れるとか、あるいは交換による換地として残して置くこと

(ニ) 村内有志の供用地

村内有志は土地開発の必要上一般避暑客の来遊を誘う為住宅を経営するのは必要のことであつて初めはその村民のみを目的としても経営維持されて行く位の程度を標準とすれば消極的ではあるが安心である、そうして追々に来遊者を目的として発展させる。

今試しに現在候補地六十町歩を大体右の様な標準に基づいて配当して見ると左の通りになる。

道 路 敷 約二割 十二町歩
村 直 営 地 三割 十八町歩

住宅貸付地及び売却地	一割 六 町歩
地元有志供用地	三割 十八町歩
雑用地	一割 六 町歩
合 計	六十町歩

以上の区画は大体の立案であるがそれら区画の方法は将来の発展を見込して融通の利く様にして置くことが大切である。例えば村の直営地と地元有志の供用地とは大体融通し合うものであるが売却地などは一度決行したなら、最早取り戻しの出来ないことであるから土地の発展の為に必要な最小限度に止めて置くべきで無理に多くを処分する時は後に至つて後悔する様になる。

また売却にあつて注意すべきことは買い取つた人が住宅を作ることを目的とするのではなく、またその土地を利用するのでもなく、自然に地値の増加する時期を俟つて転売して利益を得ようという考えの下に買い取ることがあるから初めに注意して契約する必要がある、早く住宅地としての体裁を整え建物を増やそうとする上からいけばこの契約は当然の必要である。土地会社などに経営させると資金の関係上初めは売却を急ぐ傾向があつて後になつて何れも経営上の統一を欠くというが、そのような悪例は中々少なくないのである。

もし将来菅の台一帯の土地では狭いという様な発展の状態に達した時は誠に結構なこと、このような場合には馬見塚の第一候補地を避暑地として使用すれば宜しい。

四、道路及び一般交通機関

菅の台避暑地及び駒ヶ岳登山には東西何れよりするも中央線辰野駅に出で同所より伊那電車によつて赤穂村に達するのであるがその間行程実在に九里、現在では優に二時間はかかる。この時間短縮は他の設備の様に容易に改善されないかも知れないが、夏季は特に電車運転の系統について当事者と協議を重ねた上院線連絡の時間に発車するものは一日四五回に過ぎないのであるから、これだけは高遠原までの間主要駅にだけ停車することにして時間の短縮を企てれば来遊者にとつて至大の便利である。元来中央線の列車は甚だ不快なるものであるに加えて、下車してからまたも二時間を要するのは更に苦痛を増すのである。運転の方法によつては赤穂まで一時間半ないし一時間位に短縮されるであらうと思う。次に伊那か

ら大田切、赤穂、小町屋、伊那福岡の四停留場に至る乗車賃金は何れも均一にし、赤穂駅を中心として何れで下車しても差支えないこととし避暑地行きを便宜を図ることにする。

赤穂停留場は避暑地の入口として大切な関門であるから相当の設備を加える。まず停留場前には案内所を設け人力車、馬車、自動車等の集散地とし、総して施設はここを中心として計画され統一する方針を立てねばならない。例えば道路でも交通の機関でも物資供給でも何れもその中心地として設備を集中する。

次に道路について説明すれば元来道路というものは通行を目的とするものとする目的物至るための方便として造られるものがある、ここにいう公園連絡の道路のようなのは連絡さえすればよいので即ち通行の目的であるが、駒ヶ岳連絡の森林公園の道路などは通行というよりも景勝を探るのが目的である、どんなに立派な風景があつてもこれに達する道路がなければ好風景も無駄に埋れて世の人の眼に触れる機会がない、例えていへば宝庫の中に稀代の宝物を仕舞い込んで置いても、これを開く鍵がなければ世入の鑑賞に触れることの出来ないのと同じである。道路は正しくこの鍵である。

故に散歩逍遙のための道路は道幅など必ずしも規定通りでなくてもよい。例えば六尺と定めて設計はしても、時に五尺でもまた七尺でもよい。交通本位の道路であつても自動車の通るためには少なくとも四間が必要であるが、地形の関係上短距離の間だけなら二間半までは差し支えない、道の両側にある排水溝には石の蓋をして道敷を拡げることさえも出来る。

次に路網の配置を考えて見るのに大凡左の通りであつて、必要の程度もまた第一路線より順次第五路線に及ぶ殊に第一路線は赤穂村の中心区域と避暑地とを結ぶ幹線であるから、少なくとも早く現在の路線を改修し必要の機会至らなければ自動車運転して連絡をとることとする。

第一路線

赤穂を起点とし西行して大宮五十鈴神社前を過ぎ避暑地に至り更に光前寺門前に到るもの、これ延長約一里十町

第二路線

小町屋停留場より光前寺山門に至り前記第一路線を合するもの

第二路線

第一路線の大宮五十鈴神社前より分岐し、馬見塚公園に到り更に伊那福岡停留場に到るもの

第四路線

小町屋停留場より大御食神社を経て赤須城趾に至り、更に赤穂停留場に達するもの

第五路線

自動車運転する場合には共楽園より福岡に至る県道を利用するもの

以上何れも現在の道路を改修し路線を正しく利用することとし、来遊者の増加するに従い自動車運転の必要となる時機が来るのであるから、前記の様に将来は少なくとも二間半ないし四間に拡張し得るだけの予定をもつて計画して置くべきである。

第一路線の南側にはまず並木を植える、殊に南側から強い日射を受けるから夏季は殊に緑陰の必要を感じる上から並木は第一に着手すべき事業である。樹種は町に近い方にはプラタヌスを選び、避暑地近くになるに従いヤマモミジ、ヤマザクラを所々に混じて列植とし、三四十間毎にケヤキを挟めば、出来上がった後には美しいものとなる。但し高さは何れも九尺前後、目通り周囲四五寸の太苗木を植えるので植栽の後は幹や根の保護を十分にすべきは勿論である。

これら路線の関係は後に廻遊公園の項に入つて再び説明する、またこれら路線は別図に示して置いた。

第一期計画

第二期は即ち本来の事業であつて、また眼目とする所である。その要項は左の通りであるがこれは項を新にして述べようと思う。

一、菅の台一帯の避暑地計画

二、駒ヶ岳登山の順路

三、不動瀧及びその附近の探勝

四、廻遊公園

第四、管の台避暑地設計

管の台とは俗称であつて、実は切石ヶ原籠ヶ澤前山を中心とする一円の丘陵地

が今回の避暑地経営の区域であつて、北の境には太田切川流れ西は赤穂村有林、東は新に開墾しようとする耕地に接し面積約六十町夢を算し、その中には数条用水が流れている。

今主要な設備を説明して見れば

一、建築的施設

避暑地全体を通して建築上には建築内規とも言うべきものを作りたい。そしてそれらの配置、様式、構造等出来るだけ統一ある方針の下に建築したいと思つ、これ軽井沢の様に比較的広大な地方にたゞ別荘が散在して居るのは異なり狭い纏まった区域に住宅地を建設するのであつて併せて高原の避暑地の特長を気分とを表わしたいからである。しかしこの建築法は現在の様に建築様式過渡時代にあつては、かなり実行は困難であるかもしれないが此の考は時世に先行するもので経営者にして深謀遠慮の下に敢然この計画を実行するならば必ず数十年の後に於いてこの立案の正当にして、また時世を洞察した計画であつたということに気づく時代が来るに違いない。即ちその方針として建築に統一あらしめ周囲と調和させ様とするには洋風建築によらなければならない、建物の輪廓線の鮮さと屋根や壁面の裝飾に意匠を凝らす建物でなければこれ高原の気分になつて添わないのである、和風の陰気な建物を許して造られては折角の計画を引き立たない。しかし絶対に和風建築を許さないというのではなく風致上特に焦点となる区域には必ず洋風とし八目に触れない区域には和風で差し支えないことにすればよい。

(イ) 避暑地入口

赤穂停留場より避暑地に達した時はそこに何か標識となるものを設ける必要がある。言い換れば避暑地入口の広場という様なものを作り弦に自動車、人力車等の駐車場を置き、また避暑地事務所あるいは案内所の様なものを作る。

(ロ) 倶楽部兼用料理店及び旅館

籠ヶ澤前山の高地を選んで村直営の倶楽部兼用の料理店を建築する、そうして当初は従来村内行つた集会や宴会な空をここに移すことにする。それが自然と地元繁栄の基となるのである。建築木骨様式は近世式、階建てにする。

これにて旅館を作る。しかしこれはいくらか発展して避暑客の数が増加してからも宜しい。これ前山というのは全区域中眺望最もよく土地が高燥であるから重要な建物は皆ここに集めて建てることにする、前に述べた村直営地の中心となるのは恐らく前山であろう。料理店は現在こそ兼用にしてあるが将来発展した暁には別に独立した一棟を建てるのも宜しい、次で温泉場、娯楽室、演技場、音楽堂などそれぞれ必要に応じて計画するので今はその整地だけを選定して置けば十分である。

(ハ) 水泳場

倶楽部に接して一廊を作りこれに水を導いて来て夏季の水泳場にする、外は天幕で覆つても宜しい。あるいは野天で宜しい、大きさは幅二十間長さ四十間位で底に浅い所は三尺深い所で九尺位あれば自由に泳ぐことが出来る。地盤よも低く掘り下げるので水位は丁度宜しい。この水はこれより更に低い所へ落として、また一つの水泳場を作るこちらは一般公衆用とし自由に誰でも水泳が出来るようにするこちらはやや大きいので幅二十間長さ六十間位で中央に噴泉を作り飛込み臺、船、筏、「いかだ」、板子その他遊泳に必要な設備を施し水辺に脱衣場を置き監視人を置く。また売店を設ける、これ両方の水泳場の間には人工で瀧を落とすことにする。水底は粘土質の赤土を五六寸厚みに堅く敲き堅め、その上に砂利を三四寸の厚さに敷き固めれば透水する憂はない。

(ニ) 誘いの住宅

村内有志はまず誘いとして避暑地区域の内に率先して二三の住宅建築を造るのが経営地発展の一因となるものである、これは別荘建築の範となり同時にこの地方住宅の典型となるものであるから誘いの意味を十分に現わしたものでなければならぬ、それには明るいバンガロー式などが宜しく軽くて明るい直線の多い型にして壁面を屋根とに意を用い前庭なども努めて花園とし従来より木柵を透して庭内の花が見られる様な構造も面白い。

(ホ) 諸種の小建築

休憩所 諸所に無料休憩所を設け接待の湯茶などを供える。
展望台 眺望の良い箇所には展望台を設ける、それも一様な形としないである
場合には四阿風に、ある場合台には櫓「むくら」の様に組立てとし時には小住宅風に

してよく周囲の景致と調和する様な体裁を選ぶこととする。
喫茶店 来遊者の多い時には諸所に簡単な喫茶店を作り極めて手軽に茶を飲み休息の出来る様な設備をする。

(ヘ) 貯水池

避暑地の東には新たに開墾されようという数十町歩の水田がある。これに灌漑「かんがい」する水は太田切川より引いて来るので、その途中に一つ貯水池を設けようというのであるが、これは単にかかる用の目的のみでなく避暑地における風致の一つに取り入れることを試みれば面白い村の計画によれば約一万坪の敷地を選んであるのでここには夏季の間ボート、和船等を用意して置き周囲の馬踏には日陰となる樹木を植えれば水辺の散策に適当する。

(ト) 競馬場

将来は必要に応じて運動会も設けるし、また競馬場をさえ設けることもあるがため予めそれだけ区域を予定して置く。競馬場に関連しては馬術練習場、馬見所、馬場、馬房敷地等をついでに予定して置く、外人の避暑客を迎える場合には或いは案内早くその必要を見るかも知れない。

二、造園的施設

避暑地全体が美しい自然に囲まれて居るのであるからこれ以上余りに多く粉飾する必要はない。

(イ) 牧場地の選定

避暑地滞在客に新鮮な牛乳を供給する目的をもつて乳牛の放牧地を定めるのは避暑地設備の大切な条件である。その区域は余りに人家近い所では蠅「はえ」の発生が多く衛生上宜しくない。今その条件に協う候補地を物色して見ると第一候補地は俗に古城という地点でここは勾配緩く方向もよく土地高燥に草の発生も十分である、第二候補地は黒川の発電所より峯へ登った所の東側で前者に比べて地況は劣るけれども管理上便利が多いという長所がある。

(ロ) 養魚池

養魚池の設備はこの様に水量に豊富で勾配が十分な所では極めて容易である。これは避暑地居住者に新鮮な魚族を供給する目的であるから土地の生産的利用である、その構造は高い所から段々に一反歩位宛仕切つて造るので水の流れの工合

も魚の繁殖も宜しい、その中に飼養するものはイワナ、ヤマメ、アメマス、コヒ、ウナギ、ドゼオ、スッポン、フナの種類としその中にある池は釣堀の用に供し避暑客の慰みに魚釣りをさせるも一興である。その設備としては水辺に茶店を作り釣道具一切を貸付けることとし釣高に応じた賃金を支払わせるとか、あるいは回数制にすることも面白い。また池の中へ釣台を張り出すか棧橋を丁字形に持ち出して水面を成るべく多くの人が利用し易い様に区分する。この池に放養するのは比較的大きいものを選びあまり餌を与えずに置く方が宜しい。

(八) 太田切川堤防櫻樹の植栽

太田切川の右岸にはヤマザクラの大苗木を並木状に三列に植える。

(九) 植樹帯

籠ヶ澤前山下の広場に地盛りして約五千坪程の大運動場を作る、これをして芝生帯を作りその周囲には並木を植えて飾りとする、その樹種はイテフ、ケヤキのようなものを用い、そうして諸種の建築物即ち料理店、旅館、公会堂、倶楽部等を運動場との連絡または川岸沿の並木道の連絡は所謂散步道の体裁とし短い距離には道幅を広くして並木を二列ないし四列に植え長い距離にはその道筋の配置を考へて単調に及ばない様に連絡し要するに全体の経営地を一团として統一ある配置を作ることとする。即ち一大公園の中に住宅あり運動場ありその他の設備が整っている様にする。従って運動場はそれだけで意味をなすものでなく他のものと結びついて初めて意味をなすという様に全体から見て設計することを主眼とする。

(十) 果樹園

果樹園は設備の中で第一に作るべきものである。これ果樹の生長は花や草の生長の様に一朝一夕のものでないから早くから植栽して置く。そうしてこれは実用という意味からいっても大切である。外人避暑客に新鮮な果物を供給するので放牧場と共に高原生活の楽しみである。この辺では蘋果「りんご」、葡萄、梨、柿、桃、櫻桃、李、その他適当なものを少しずつ栽培して置くので実際には需要が増して来たら他の地方から供給して貰っても良いからとにかくここで新鮮なものが出るということを知らせる目的が達せられれば宜しい。

(十一) 花園

花園、花壇などにはその季節季節の花物を植えて高原の気分を柔げ紅紫とりど

りの美観を添え併せて実用上切花などにして外人向きに必要な多いものである。またこの地方特有の高山植物を集め一つの高山植物園を作つて置くのも興味のある設備である、栽培の困難なものや特殊の設備をしなければ育たないものなどは止めても宜しい。

(十二) 動物舎

水禽類カモ、パン、オシドリ、クヒナ、サギ、ハクテフ等を放養した水禽舎、小鳥を放飼した鳴禽舎、猿の雑居して居る猿舎、その他鹿や熊を飼う動物舎を所々に配置する。

(十三) 小運動場

ある区域にある住宅または旅館滞在客のため共同小運動場を作る(例えば住宅三十軒毎に一箇所とかいう様に)。そうしてテニスコート、弓術場、クリケット、運動諸器械の据付、散歩場等を任切つて朝夕の散歩、運動に、家族卒つて安心して遊べる様な設備をして置く。

(十四) 建物の前庭

避暑地に作られる建物には前庭を設計する様な規定が欲しい。高原の自然の美を背景として別荘住宅を設計する時に最も簡単にかかる田園風の気分を表すに適するものは前庭である、道路と建物との間には三間乃至五間の花園を作り外圍は木柵または網垣とし柵の裏から美しい花の咲いている庭が見える様にしたならば住む人も見る人もいかに愉快であると思う。

(十五) 見本園

教育的施設としては見本園即ち諸種の有用植物のある区域に分けて植え付けその効用、種類、習性を一般に知らせる計画をする、またこの地に適當する外国産木を集めて標本にするも有益である。

(十六) 苗圃

経営地内の一隅に苗圃を設け避暑地に植栽する並木、緑陰用その他諸種の用に供する苗木、草花苗等を培養して置き必要に応じて植え出す様にすればいちいち他から買求める費用を省けるし土性の違つたために移植の困難を来す様な心配もなく最も安全確実に植栽及び補植の計画が立てられる。

三、光前寺境内の改良

光前寺は、貞観二年の開基で信州天台宗五大寺の一つと称されその庭園は夢想国師の作と伝えられている、現在池の中には水草が多く茂り過ぎていたがこれらは現況を傷めない程度に掃除手入れを加える必要がある。

境内森林は誠に幽邃で殊に背面の森林は地形高まっているのと相俟って林相は申し分ないが、しかし大部疎開し初めた様であるから今より努めて森林に保護を加え地力の減退しない様に地被物即ち落葉、朽枝、鮮苔の類を剥ぎ取ることなく日光が直接地表に当たらない様にする。また参道の杉は寺の創建と同時に両側に植えられたものと思われるが、次第に左側の方は枯れて現在の様に右側だけに残ったものと思われる、これはどうしても昔の有様に帰さなければならぬ。それには両側を通じて五六尺の杉の大苗木を二王門内の今の空所に植え足し、尚出来るならばそのうしろの畑の中に二列位に補植して置くのが宜しい。また参道の両側(出来なければ右側だけでも)に石垣の裾に沿って小さい溝を掘り割りこの緩い勾配を利用して上の方から水を流す様にすると今より一層幽邃「ゆうすい」になる。次に中門内の二重伴池は支那の寺院境内の古型であるから現況に手を加えず池の底に溜まった朽葉や泥土を浚い出して水の清く流れるようにする水の落ち口の上には常緑の小灌木を植えて見えない様にする方が奥床しい。

寺は、大正九年四月の開帳を記念し現在境内に講堂を設けるといふ案になつてゐる、そうして将来避暑客のため、または村民のために開放して講演会、談話会、法話会等の会席に利用するというのであるから避暑地のために好都合である。その新築の講堂は現在庭園の上手に作り参道より新規に道を開き、これに達する様にする。このように現在寺門内の客殿横手の庭園の上手を通る道を開ける時にはこの道幅は狭くして成るべくこの庭園の現状に手をつけなければならぬことを要する、殊に岩組などを動かすようなことは絶対に避けなければならない。

第五、駒ヶ岳登山道路

駒ヶ岳は海拔千七百五十五尺、甲州駒ヶ岳を東駒ヶ岳と称するに對しこれを西駒ヶ岳という従来は木曾の上松から登山し、伊那路においては、伊那から登山する方が多かつたが赤穂から登る方が道程が近い。しかし現在においては完全な道が無いという有様で木馬道を通るなどは木材の運搬をやつてゐる時には危険であ

る。故に速に登山道路を作り赤穂から登山する人の便を図らなければならない、今その道筋を示して見れば

第一登山道路

避暑地を出発して黒川発電所の前から黒川を右に見て峯通りを登り木曾殿越えを左に見て不動瀧の水源である烏帽子山の峯続きを進み黒川山御料林の中を通つて馬の背に出て千疊敷を左に見て前岳に至り再び峯通りを剣ヶ峯の麓に至るこれより道を右にとつて本岳に登り駒ヶ岳神社に参拝するので現在では、山頂に泊るものは左に折れて木曾の小屋に行くか、または右に折れて伊那の小屋に行くのだが将来は、この剣ヶ峯の下の平地に石室を造る必要がある、ここは眺望、位置共に石室に適當した所であるから完成の上は赤穂方面から登山する人のために多大の便利である。ここに一泊して翌朝は本岳に登つて御来光を拝し濃ヶ池に下る、ハヒマツの間を縫う様に行つて行くと左手に木曾の御嶽山指呼の間に現れ三つの峯は呼べば答へん近きに見える、また遙かに遠く乗鞍岳、槍ヶ岳、白馬等の連山が見える、右手には八ヶ岳、東駒ヶ岳、赤石連峰、富士山等の秀峰が望まれる、濃ヶ池から小雪溪を横切つて駒飼池の傍に出て、剣ヶ峯の下的小屋に出る、そうして初めの道を順次帰途に着く道筋である。

第二登山道路

千疊敷に出る前に前の第一の道筋を経ないで黒川の発電所より木馬道に出るとその尽きる所に棧手「さで」道がある。それより唐松や樅の生えている天然林の中に分け入つて急峻な山腹を一気に登り詰めて前記第一の道筋と峯通りにおいて合するのでこの道筋は急ではあるが近路で登山でも下山でもいづれにも用いられる下山の方は木材搬出に会うも危険が少ない。

第三登山道路

これは山上に一泊して帰途に就く時、濃ヶ池から伊那の小屋の前に出て将某頭「しようぎがしら」を経て八町立を通り天然林の間を縫つて下り辻の小屋で道を右にとつて林道に出る。そうしてこれからは単調な山腹の道をひた下り下つて黒川の合流点東に出る。この道は不動瀧の探勝を兼ねる場合には都合がよい丁度瀧の正面に降る道筋を通ることになり溪を隔てて二の瀧が見られる、辻の小屋から左に折れば西春近村の小出に出る。

次に登山設備に就いて主要な事柄を一言すれば、

一、石室を剣ヶ峰下の平地に作る。現在は伊那の小屋、木曾の小屋に石室があるがいずれも赤穂の方面から登る人のためには速きに過ぎ眺望からいっても劣るようである。しかしこの石室は単に赤穂村のみの仕事ではないから駒ヶ岳保勝会の仕事として伊那町、宮田村、赤穂村等の有志の手によって築造することにした。

二、木曾殿越えの見える箇所には道の側に立札を立てその方向を指示する、その他山中における名勝地例えは不動灌水源、千畳敷、剣ヶ峯、駒飼池、濃ヶ池、天狗岩等にはそれぞれ堅固な立札を立てその由緒を示して置くことにする。

三、道の分岐点には石で造った指道標を立てること、そうして方向、里程、目的地等を明示して置く。

四、道程は精密に測量して石標に刻んで一里または半里毎に立てる。

五、道案内としては別に登山図を作り登山者に配付しこれには道筋を番号別に記入しその番号を道中の大岩、大木の幹などに白または赤い塗料で大きく書き付けて置く(一)⑤のようにする(二)×⑤とあればこの両方の道路の合点であるという様にすれば分かり易い。

六、登山案内所を避暑地に設けここで前記の登山案内図を配付しその他登山心得、里程表、登山案内記等を販売し傍ら誠実に登山人その周旋、登山用食料、器具、寝具等の世話をする。

七、前岳より上に登り四方展望の出来る所には夏季登山季だけの保存でよいから堅固な休憩兼一時的避難小屋を設ける。

八、登山の途中に水の湧出して居る処、眺望のよい所などは登山者の休憩したい所であるからここにはベンチを置くと眺望台を設けるとかし、その附近見え易い所に登山心得の主なもの掲示する。例えば高山植物濫獲の禁止濃霧等に遭遇した場合または道に迷った時の心得などを簡条書にして不慮の災厄を多少なりとも未然に防ぐ用意をする。

第六、不動瀧探勝 附 天然植物園

駒ヶ岳黒川山御料林内の秀峰烏帽子山の中腹海拔六千八百尺に水源を發し水平距離僅々十町の間に一躍四千尺を下って海拔 千八百尺までの間に俗に四十八瀧

といわれる位に無数の瀧が連なつて落下して行く、我々の調査した処によつても重要なもの三十有餘を数えた。水源は泉でも川でも無いので烏帽子山の皺曲より滴々とし、し滴り落ちる三十有餘の小溪谷の流れが合して彼のような壯麗偉大な二の瀧を現すので以つてどのように急峻なる傾斜であるかが想像される。

瀧の形は何れも違つたので我々が造園上瀧の型式を研究する上には大に参考になるのであるが余りに上流の方は到底普通の登山準備では探険し得られることでは無いから一般探勝には中位以下の瀧の観賞で十分である。流れ瀧、瀬瀧、一段落、糸瀧等その形は千差万別で氷の様に冷たい水の溢れる瀧壺の中には時に山椒魚の沈んで居るのが見られる、一の瀧というのは不動橋の下にある、次いで橋より正面に見られる二の瀧は直下三十丈で最も雄大、その上に三の瀧、六の瀧、九の瀧などあり何れも見ればべき価値がある。この瀧を総称して不動瀧というのは往昔光前寺開山本聖上人靈夢に感じ、この瀧の中に不動の尊像を得て光前寺を建立したという縁起による。瀧の多いのは一つの偉觀であつて瀧に沿つた崖の景致など中々捨て難い趣を持つて居るが、その探勝は前述の様に中々困難であつて、現在では命懸けで無ければ到底出来ない我々は四千尺を下るに数時間を要し幾度か危険を冒し辛うじて瀧壺に陥ることを免れた地形がこのようであるから、この探勝は道路を直し設備を加えても中々困難である。今最初に瀧に至る道筋を示し次に探勝道路の選び方を述べることにする。

瀧の探勝には上流から下りながらするのと下流から上りながらするのと両様ある、前述の様にこの瀧はただ下から見上げたばかりでは、真値は分からない、瀧の流れに沿つて上下する時に初めて雄大な自然美となつて感ぜられるのである。

瀧の水源即ち烏帽子山の殆ど絶頂まで行くこととするには黒川發電所から峯伝いに駒ヶ岳登山の第一道筋を進み村有林を黒川御料林の境より次に述べる天然植物園の内に分け入り、その中腹を伝つて上流に達する。また瀧の落ち口即ち不動橋の二の瀧に至るには黒川の左岸から山へ登り中腹を真直に進めば不動橋下り口の分岐路に達する。この道筋は駒ヶ岳登山の第二道筋に当たる。この分岐点より四五町急峻な小径を下れば雷雪の轟く様な地響きが聞こえる。ここが不動橋で橋下に俯すと一の瀧が見え仰げば眼前に二の瀧が懸つている。この両方の道筋は何れも単調である、前者は天然植物園を観るための道であるから意味があるけれども

後者は、全く単調な山腹道で何一つの見るもの聞こえるものもない、故にこれに代わって今少しく変化のある道筋を選びたいと思ふ。それは山腹を行く代わりに溪流に沿って登るのであって黒川の合流点より溪流に沿って水際の新道を開き緩い傾斜をなして進むので少しも登山に困難を感じない時に岩を渡つてあるいは左岸にあるいは右岸に道は飛び交す様になるが、このように地形に準じて道を作ることは労少なくして興の深いものである。従つて時には岩を渡る揺り橋を架けたり、断崖を連ねる棧道「さんどう」を設ける必要もあるしあるいは迂迴する余り一時溪流から遠ざかり山の中腹に出ることもある、不動橋近くに進むに従い溪谷が狭く急になるからかかる必要が多くなる。素より豪雨の時などには到底歩けるものではないし、また探勝も出来ないものであるから平水を標準として計画すればよい、これ中腹の道より約半時間行程を短縮し一時間余りで達せられる上に自然美の変化最も面白く不動橋までは良い散歩道となる。

次に瀧の設備改良に就いて述べれば余りに上流の瀧の形は面白いが水量も少ないしまた峻峻「けんしゅん」であるから大体中央位の瀧から一般に観ることの出来る様切り開きをつける、そうして下から見上げて上流の方は樹の枝が差し交わし如何にも奥深い心地がする、瀧に沿つて下へは現在では非常に困難である。これ断崖絶壁であつて樹の幹や草の根に支えられて辛うじて降り得るので一度手を離せば瀧壺の中に落ち込むという危険があるからそのためには下る人のために瀧添いに鐵鎖「くさり」をつけ、または梯子を設けるいは岩を切り崩して足懸りをつける。それでも危険で瀧の傍に行かれない場合には林内に迂迴した道を造らなければならぬ必要がある。

瀧の流れの中には、崩れ落ちた土礫で埋まつて居るものがあるし、朽木で水流を阻んで居るものもあるし、また瀧壺の全く埋まつて居るものもある。これらは毎年登山季節の初めに掃除して手入れを加へる必要がある。

また瀧の番号は現在の通り下から順々に番号をつけるが観る人は、一々覚えていられないから瀧の見易い位置に「何番の瀧 何々瀧」という様な立札を立てるか、または、岩の面に白ペンキで体裁の悪くない様に記して置く瀧は形に因んで命名するのも面白い、あるいは伝説に因んだものでも宜しい。

二の瀧の瀧壺の傍に胎内くぐりというのがある。その上に不動尊を安置してあ

るが余りに荒れ果てているから、これも追々登山者の増加するに従い浄財寄進を俟つて改築しその周囲には小さい常緑灌木を植え廻らし尊前は今より少し取り上げ、中の雑木を切り払い河に臨む方の緑にはアカマツを疎植しその下にベンチを配し瀧に面する方は何も植えないで瀧見の余地を残して置く、瀧頭に登る現在の小径も少し取り上げ自由に登れる様にし、二の瀧より上に登らない人のためにこれより上流の景観を一瞥するため切り切つた瀧頭即ち三の瀧の瀧壺際にベンチを一つ置くのも宜しい。ここから中腹に至る瀧見の道は前述の鐵鎖や梯子に因らない部分は道幅も取り上げ多少の路面工を施し雨降りの際などに土崩れのない様に土留工などの用意をするのも簡単に効力が多い。

そうして、これら小径の両側を初めとし不動瀧の附近不動橋へ下る小径の両側などには出来るだけ紅葉性の落葉樹を補植することは秋の景致の人を呼ぶ一方策である、その樹種としてはカエデ類、ヌルタヤマハゼ、ヤマウルシ、シホヂ、トネリコ類など適當する。

天然植物園というのは人工で植栽したのではなく天然に生えているその地方特有の樹種を網羅した区域をいうので駒ヶ岳においては不動瀧の上流にその好例を発見することが出来るこの区域は天然林としては申分ないので、シラベ、タウヒ、モミ、ツガ、コメツガ、ヒメコマツ、イチ井を初めカツラ、カラマツ、シラカバ、イタヤカエデ等が原始的状态に生え茂つて居る、地表には朽木横はりクマサザ体を没するばかり、大小無数の雅樹その間に天生している有様は真に天然林の林相を遺憾なく現している。

この一帯の区域の内私有林に属する部分は公益のため択伐林作業と称して全林を一斉に伐採することなくよく林相を観察し利用の価値が多く、しかも天然林たる状態に変化を来さない様なものを選んで伐採することでも更に一步を進めていけば禁伐林にしたい所である。また御料林に属する区域は風致のため保安林の取扱いを願ひ出でこれら樹種とその林相を永久に保存したい。ここに生える各樹種の大木にはトタン板(幅二寸長五寸)の札を下げそれに樹の俗名、学名、漢字及び方言等を記し更にその年齢、用途などを書き示すことが出来れば面白い、この林内は逍遙するに適當ではないが、中に二三条の道路を切り開いて上から不動瀧の上流に合する様にすれば探勝の傍ら天然林あるいは天然植物園を見ることが出来る。

第七、公園系統

都市の中にある公園は単独に存在しては意味が少ないので相互に連絡があるので初めて都市公園としての意義が深いのである。これは公園系統ということでこれではこのような厳密な意味にいうのではなくただ将来赤穂村が発展して市制を布く様になった時に今日の公園系統の考えを準用して置けばその時に公園だけは完全なものとして残る理である。殊に赤須城趾公園の附近など中々景勝地であるからこれらを一人人に占有されてしまつては将来村が発展して行くに従い新しく公園でも欲しいという時にかかる絶景地を持ちながら手を束ねて見て居なければならぬ、故に尚早論であるかも知れないが今日において永遠の計画を立て村有とすべき土地などの按配を考えて置けば地上の施設は機会さえ来ればいつでも出来る土地の所有は最もその解決に困難な問題である。

今当村において相互に連絡して公園系統としての価値を有するものを物色して見ると左の六つであつてその位置の關係は「の」に図を以て示して置いた。

一、避暑地(光前寺、古城新城の附近を含む)

二、赤須城趾公園

三、馬見塚公園

四、共樂園

五、美女森大御食神社

六、大宮五十鈴脚社

是等の連絡に関する道路は曩に述べた所であるから今その特徴を略述して将来の發展に資する材料としよう(避暑地、光前寺のことは前述した所であるから省略する)

一、赤須城趾公園

赤須城趾は本来東光城趾といつので赤須爲幸の居城であつたので赤須城趾と俗稱し今日では却つてこれで通つている故に赤須城趾東光公園ともいへば適當かも知れない。

二曆応永間に片桐氏一族片桐孫三郎爲幸始めてここに築城し赤津孫三郎と号したが応永年中には小笠原長秀に属し随つて共に善光寺に参堂したことなどが史蹟にある、この子孫三郎正則新九郎清則を経て帯刀正清に到つて永録元年武田氏に属

しその子隼人正清玄の代、天文十年二月織田信忠の来襲に際し終に没落して今日の様な廢墟となつた。今は森林、畑、原野等の中に昔の斬濠「ざんこう」の跡歴然を残り地下より炭末となつた米粒が盛んに発掘される、丁度村の中心を距つて東に十七八町の区域である地上に残された遺跡を辿つて行くと中々規模は大きいものであることを知る。

ここは公園として十分な要素を持つている。試にその一二を挙げて見れば

(イ) 公園敷地が記念すべき城趾であること。ただ何等の意味のない所を異なりこの地方において最深い由緒のある城趾なることが特徴である。

(ロ) 天台の古刹長春寺の境内と接せること

(ハ) 風景絶佳なること。土地は高燥で眺望がよく前面には中澤、伊那の諸村を俯瞰し遠く天龍川を脚下に望み菅沼の長堤十町の間青松の間に櫻樹の配植されて、春季の眺望は実に見事である。顧みれば駒ヶ岳の秀峰高くこの流と相對している

(ニ) 斬濠の跡の歴然と残つて公園施設に利用出来ること

(ホ) 赤松の疎林があつて丁度森林を作りたいと思ふ所に森林が出来ているし、建築物が欲しいと思ふ所が畑になつていたので都台がよい、この赤松林を通して見た風景は中々佳いので幹越しに天龍の流れを望み夕陽正に没せんとする時など金箭を浮かべて流れる有様など捨て難い風情がある。

これらの要素があれば十分公園として成功する。今少しく実況について、大体の設計方針を指示すれば、長春寺上の赤松疎林は遠望を求めると最も適當な林相をなしているのであるから病氣のものや生長の見込みのないものを伐り払い幹の形の整つたものを残し不用の下の木や下草を除きこの林内を逍遙「しやうよう」する人が幹越しに清流を眺められる様にする、これは森林所有者に決して迷惑を及ぼす問題ではない、ただ林内に設けた道路を公衆が通ることを許してくればよいのである。

次に長春寺上手の崖地には現在クヌギやコナラが生えているがこれは追々に伐採してカエデ、ヤマザクラに代えるその下にヤマブキ、ハギ、ツツジの類を植込む、これ菅沼の方からこの方を見た時の景を主としたので上下相俟つて春季の景をなすのである、次に畑を隔てて長春寺の西側にある赤松林は可なり密林の様であるがこれも間伐して林内逍遙の道路を作り林内に埋もれた気持ちから一転して

俄かに広豁「こうかつ」な景に接するといふ様に景に変化の生ずる施業法を行うことが出来る、道路の作り方、間伐の方法、枝卸しの程度等に注意し来遊者をして飽かしめない方法を樹ることが必要である。またこれらの林内で眺望の良い所には、四阿風の休憩所を作り読書、囲碁、喫茶等に使用することが出来る様に取り計りその中の一軒に世話人を置いて管理させ万事手軽に使用させる。また、広い林内では園遊会とか林間講演会とかを開くに適当な設備をする、夏季は涼しいので講演や講話は却つて林内の方が流行するかも知れない。次に長春寺上の空地には少し大きな倶楽部の様なものを作り昔の台避暑地の倶楽部と東西相俟つて利用する、現在ヒノキが一本生えている附近は丁度宜しい、倶楽部は村内有志殊に次に述べる保存会関係者が建てるのが宜しい、そうして村民のため、公開して利用させる、建築も住宅風にしないで河を見晴せる様どこまでも倶楽部らしい気分が現れる様式を採用する。

この区域における村有地以外の土地所有者、長春寺住職及び壇家、赤須城趾に關係ある人々、村内有志等を以つて赤須城趾保存会を組織し昔の台避暑地期成会の方針に背馳「はいち」しない範圍において規約を定め城趾の保存と、進んでは公園として利用する積極的方策を協議する機関とする、例えば城趾に関する調査を初め、記録を集め展覧会を開き講演会を催し記念館や記念文庫を建てるとか記念碑を建てるとかその時々が必要と時宜に順心して適当な計画を立てることにする。以上を考へて見ると赤須城趾が最も僅少な費用でまた手数も少なく第一に公園となり得る資格を備えていると言へる。

二、馬見塚公園

伊那福岡停留場より三四町西に進むと原野状の一区域があつて面積七千七百七十八坪を算し大規模の公園は出来ないが雑沓を避け静かな天地にゆるりと休息したいという人のために手頃な公園が設計される。これが馬見塚公園である、その内に約一千二百坪の池があるが晴れた日には駒ヶ岳が逆にその美しい影を投ずるのである故に池の東側に休憩所又は四阿を作つてこの倒影を見るのは確かにこの公園の特徴の一つとなるであらう。

しかして西北の小高い部分にある赤松林は少し間伐して林内道邊道路を作り下木として萩を植え池と森との間には紅葉性の樹木を植えその林間には夏草と秋草

を選んで配し平庭風に意匠を凝らし夏より秋に利用する公園を作るのも一方法である。

三、共楽園

大田切川の流に沿ひ眺望の良い丘陵地を占めているのが共楽園で現在遊園地として適当な位置にある、昔江戸一行院の住僧田伏徳本上人ここにおいて供養の営みたりとの縁により里人は徳本林といつていたが明治廿「じゅう」六年初めて遊園地となつた。

流に面する側には低い灌木の生垣を作り園内の芝地に生えている萱の株は刈込んで更に少なくするかあるいは野芝に代えるのも宜しい。大体において現在のままで多少の手入れを加えれば遊園地として見るに足る。村より伊那町に通ずる県道から公園に入る方は無難であるが電車の側からこの丘陵に上る道が面白くない、今少し取り広げて勾配を緩にし容易に登り得る様な道にすることは必要である。

四、大御食神社

郷社であつて宇宮ノ前にある、景行天皇の時代から由緒の深い神社であつて神代文字で書かれた社伝記などもある、背面の森林は美女森と称し郷社たる神社境内としては、まず完全であるただ神社背面の森林の鬱閉「うつぺい」が破れ下木の生長が不十分であるからナナメノキ、サカキ、ヒサカキ、モチクロガネモチ、ソゴの様な常緑闊葉樹を密植して地表に湿気を保たせる様に、そうしなければ上木である檜の生長が衰える憂がある今よりこの注意は必要である。

五、大宮五十鈴神社

村社で町の西方大手にある、村社としては境内の整理は申分ない程であるが、神社の背面にある森林を通ずる道路は公衆の通行を禁止し何か下木の類を植え潰さなければ前社同様森林の保護からいつて後日悔を残す様なことになるから色々の便宜はあるには違ひないが通り抜け道路の通行は断然禁止すべきである。

以上の公園または神社は村としては唯一の勝地を将来村の発展した時を考へて見るとこれらは丁度適当な位置に配置されてあるから村の当事者はこれらを連絡する道路、またその道路の通る処にある大小の旧蹟や由緒地などを調査し遠き将来にはこれらを廻遊公園式に利用すべき秋であるのを思いその間の連絡道路の予定に就いては村有地整理道路改修等の場合に心懸けて置くべき問題である。

第八、雑

一、中央線、東海道線、北陸線その他院線主要駅
春季より初夏に亘って避暑地案内、登山案内を配付すること。

二、中央線辰野駅前

夏季だけ避暑地案内図、登山案内図を大なる広告板に描いて目につき易い所に掲示すること、及び同駅前避暑地の実地案内として避暑地期成会または保勝会の出張所を設け夏期中は常時事務員を置くこと。

三、赤穂より駒ヶ岳への登山案内記、昔の台避暑地案内記

出版し広くその宣伝を試みることに、雑誌、新聞によって広告するも時に必要なる手段である。

四、車馬賃

赤穂村内においては避暑地または公園行の車馬賃を一定して随所に掲示すること。

五、組合

避暑地においては組合を設け飲食費、宿泊費、売品定値、案内料等を一定し来遊者に不安の念を抱かせない様にすること。

六、駒ヶ岳の山開き

行うこと。その時期は例年ほぼ一定とする、そうして避暑地内適当な所に駒ヶ岳神社を祭祀し小さい殿宇を建てここで山開きの儀式をする、こうして赤穂村から登山する道路は必ずこの境内を通すこととする即ち境内に特に駒ヶ岳遙拝所を設けそより登山道路を通ずる様に。

七、伊那電車

夏季の間赤穂、大田切、小町屋、伊那福岡の間に均一乗車割引券(回数券及び定期券)を発行し何時にても公園に来往出来る様な制度とすること。

八、赤穂村内の商人

商工会の規約を設け一定の標識を附した避暑客には特に便宜を図る様にすること。

九、夏季大学

年々または隔年に開催する、それは、当分は光前寺の講堂を利用しあるいは赤

須城址の林内講演など面白い計画である。

一〇、登山道

登山の道中においては清水の湧く所は仮令少量であっても必ずこれを追傍へ導き出し、飲料または洗面用に供する設備をすること。

一一、名物

作って売り広めること。例えば絵葉書、案内記、餅、酒、羊羹、菓子、焼物、木工細工、蔓細工、竹細工、挽物細工、乾魚、植物標本等を選び駒ヶ岳の名称を付けて販売する。

【後記】

本多静六が公園にかける想いを、この計画案を通じて感じました。(小池)
現代語訳をしたこの計画案を多くの人に読んでもらいたいです。(齋藤)

文書が長くて手ずりました。これからのまちづくりにも大変活かせる文書だと感じました。(阿部)

(北條)

本稿の位置付けを別稿「本多静六と関連する長野県内の公園・温泉地・風景地の計画書の目録および現代的価値」に記しました。ご覧ください。(横関)